

令和6年度
第41回

道徳と特別活動の 教育研究賞

特別活動の部
文部科学大臣賞・最優秀賞

熊本市立大江小学校

「心豊かに未来を切り拓く大江っ子の育成」 学習過程「かんぱい」の授業づくりを通して

●研究主題

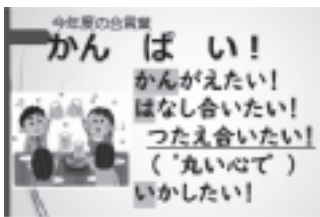
「心豊かに未来を切り拓く大江っ子の育成」
学習過程「かんぱい」の授業づくりを通して

1 研究主題設定の理由

平成二十九年に告示された小学校学習指導要領について、『小学校学習指導要領 解説 特別の教科 道徳編』によると、道徳教育は、人が一生を通じて追求すべき人格形成の根幹にかかわるものであり、同時に、民主的な国家・社会の持続的発展を根底で支えるものでもある、とされている。ここで述べられているように、道徳教育はグローバル化が進み、

VUCAな時代（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）とも言われる現代だからこそ、これまで以上に大切にされるべきものだと考える。本校では、平成十五年度に「心の教育」の充実に関する研究をスタートした後、平成二十年度から特別活動と道徳の時間（現在は道徳科）を中心に据えた道徳教育に取り組んできている。集団活動や体験活動といった道徳的な実践を行う機会が多く、かつ目標や育成を目指す資質・能力が道徳教育と関連が強い特別活動と、道徳的判断、心情、実践意欲や態度といった道徳的な実践を行うために必要な内面的資質を養う道徳科の二つのアプローチで研究に取り組んできた。

昨年度は『学習過程「かんぱい」の授業づくりを通して』という副題の下、授業づくりや実践を積み重ねた。「かんぱい」とは、本校が授業づくりで大切にしてきた要素「考えたいと思えるような導入の工夫」「話し合おう（丸い心で）とするための手立ての工夫」「（これから）生かそうとするための工夫」の三つの頭文字をとった、昨年度作成した本校の研究における合言葉である（資料1）。この「かんぱい」を全職員で共有して授業づくりや実践に取り組んだ結果、本校が行っている大江質問紙調査（五月



資料1

↓十二月）において、みんなのことを意識する心の伸びが見られた。これは、本校が設定している「四つの心」の中で特に本校職員が子どもたちに意識付けてほしいと感じている「いなほの心」に値するものである。

このような経緯から、今年度は昨年度までの研究の成果と課題を基に、「かんぱい」という学習過程を継続しつつ、さらに学校全体の取組を充実させていくことにした。

2 研究主題について

（1）「心豊かに未来を切り拓く大江っ子」とは：

本校では、それぞれの言葉を次のように捉える。

- 心豊かな子ども
- …自他と向き合う子ども
- 未来を切り拓く子ども
- …よりよい状況を創りだす子ども

本校では、自他に向き合うとは自分や身近な人や集団、社会といった他者、自然や動物といった人間以外の生命のどちらも大切にするために必要な道徳的な判断力、心情、実践

意欲と態度を備えていることであると捉える。この子どもの姿を実現するべく、各学年の子どもの実態や教師の願いを踏まえ、具体的な子ども像を設定し、授業実践をはじめとしたさまざまな教育活動に取り組んでいくことにした。

（2）『学習過程「かんぱい」の授業づくり』とは：

サブテーマに入っている「かんぱい」は、「考えたいと思えるような導入の工夫」「丸い心で」話し合おう、伝え合おうとするための手立ての工夫」「（これから）生かそうとするための工夫」の三つの頭文字をとった本校の研究における合言葉である。この「かんぱい」の視点を全職員が共有し授業づくり及び、その後の実践にまで目を向けていくことで研究主題の中にもある「心豊かに未来を切り拓く子ども」の姿を目指していく（資料2）。

3 研究の仮説

「①考えたい（実態）②話し合いたい（自分事）③生かしたい」という学習過程に焦点を当て、特別活動における道徳実践の充実

かん…子どもの実態を基に、子どもが自ら「考えたい!」と思えるための議題や提案理由、めあての設定といった出合いの工夫

- ・子どもによる事例の取材活動
- ・アンケート結果の分析
- ・インタビュー動画等の活用
- ・これまでの体験と振り返り合わせて

ぱ…子どもが課題や道徳的価値について自分事として捉え、自分の考えを広げたり深めたりするための手立ての工夫

- ・ペアやグループでの話し合い
- ・役割演技や思いを伝える
- ・考えを書く短冊やカードの活用
- ・問い返しやゆさぶりの発問

い…子どもが話し合ったことや学習したことを基に、「これから」につなげていくための評価や場の設定の工夫

- ・実践や振り返りカード等の活用
- ・掲示コーナーの設置
- ・アンケート調査の実施
- ・ゲストティーチャーの活用

資料2 「かんぱい」の授業づくり

年 組 番 氏名					
これまでの自分をふり返って答えてください。下の質問を読んで、あてはまる数字を書きましょ。 ①…あてはまる ②…まあまああてはまる ③…あまりあてはまらない ④…あてはまらない					
番号	質問(心)	5月	7月	12月	3月
1	自分で考えて責任のなる行動をとろうとしている。				りんご
2	相手にまじまじに相手視もついている。				りんご
3	親類や完全に気を付けて生活しようとしている。				りんご
4	自分のよいところを伸ばそうとしている。				りんご
5	嬉しいことがあってもむげずに努力しようとしている。				りんご
6	相手にまじまじに相手視もついている。				りんご
7	相手に親切にしようとしている。				さやえんどう
8	生活を変えてくれる人に感謝の気持ちをもっている。				さやえんどう
9	時と場合をわきまえて、礼儀正しくしようとしている。				さやえんどう
10	互いに両方合うような家庭関係を築こうとしている。				さやえんどう
11	自分たちが望見や立場めんのことを大切にしようとしている。				さやえんどう
12	きまみや規律がなせあるかを考えている。				いなほ
13	礼まみや規律を尊重している。				いなほ
14	誰にでも同じように接しようとしている。				いなほ
15	働くことよさを考えている。				いなほ
16	学校や社会のためになることをしようとしている。				いなほ
17	家族の一員として、家族のためになることをしようとしている。				いなほ
18	友達と協力してよりよい学校や地域にしようとしている。				いなほ
19	集団の中で自分の役割を果たそうとしている。				いなほ
20	相手の振顔や文面を大切にしようとしている。				いなほ
21	他の国の人と仲良くしようとしている。				いなほ
22	命を大事にしようとしている。				おおえのき
23	自然や動植物を大切にしようとしている。				おおえのき
24	美しいものを見た時に感動できるゆがある。				おおえのき
25	人間として生きることに喜びを感じる気持ちがある。				おおえのき

資料5 令和6年度版「大江質問紙」

（2）大江質問紙の道徳科の年間計画への位置付け

本校では、数年以上にわたって子どもものの現状や伸びを見取るために、本校独自で作成した大江質問紙の調査（資料5）を四月と各学期末に行っている。これまでの取組で子どもものの学びの自覚へと生かされにくいのでは…という反省から、一時間の授業として取り扱い、年度当初の各学年の道徳科の年間計画

を作成する際にも、この大江質問紙の調査を学期の学びの振り返りとして位置付け、どの学年でも丁寧に行うことにした。子どもたちも、自分や友達の学びの振り返りを基にしながら目標設定や自分自身の成長を自覚することができた。また、教師も大江質問紙の結果を分析することで、授業や子どもも理解に生かすことにもつながった。

（3）大江質問紙（五月末）の分析

研究推進メンバーで検討を重ねた大江質問紙を、まずは五月末に実施した。それを研究部で分析した結果、学校全体としては道徳の視点Aが他の視点に比べて数値が低いことが分かった。Aをさらに細かく見ていくと内容項目「善悪の判断、自律、自由と責任」が一番低いことが分かった（資料6）。この結果を基に各学級担任が子どもの実態を分析し、教育活動に取り組んでいくこととした。

視点	4つの心	5月
A	りんご（自分をのばす）	50%
B	さやえんどう（人となかよく）	59%
C	いなほ（みんなのために）	52%
D	おおえのき（命を感じる）	72%
Aの内容項目		5月
	善悪の判断、自律、自由と責任	44%
	正直、誠実	50%
	節度、節制	70%
	個性の伸長	45%
	希望と勇氣、努力と強い意志	50%

資料6 5月の大江質問紙調査で「あてはまる」と答えた割合

（4）四つのアイコンと掲示について

本校では、長年にわたって心の教育を行ってきたため、学校全体で道徳教育に取り組みやすい土壌ができています。この研究の過



資料3 研究概要図

○「かんぱい」の授業にしていくなめには、安定した学級経営が欠かせない。概要図の中に学級経営も入れ、「かんぱい」をより広い視点で見えるようにしたらどうか。

○特別活動の手立ての中で、もう少し実践に関しても触れられたほうがよい。

○見取りと価値付けに関しては道徳科にも特別活動にも手立てを明記したほうがよい。

こうした意見を基に、令和六年度の研究概要図（五月段階）を作成していった（資料3）。今後、研究実践を重ねながらこの研究概要図に加筆修正を行っていくことにした。

5 学校全体での取組

（1）学年部の目指す子ども像の確認

年度初めに、研究主題から連想される各学年の子ども目指す姿を話し合い、学年末の子ども姿（資料4）を意識して教育活動を行うことができるようにした。この取組により、目指す子どもの姿が職員の中で共有され、実態を捉えた実践につながっていった。



ひまわり	自分で考えて動く ひまわり学級
1年	自分で考え、考えたことを友達に伝え、協力して活動することができる子ども
2年	自分で考える子ども みんなで考える子ども やってみようとする子ども
3年	相手や自分のことを大切にし、よりよく考え、行動する子ども
4年	自分で考え、人と考え、学びをつなげてみんなで伸びる子ども
5年	自分が得意な分野で周りの友達を引っ張っていこうとする子ども 高学年として、他学年の見本として活躍する子ども
6年	自分を見つめ、なりたい自分に向けて粘り強く取り組む子ども みんなのために進んで考動できる子ども

資料4 目指す学年末の子ども姿



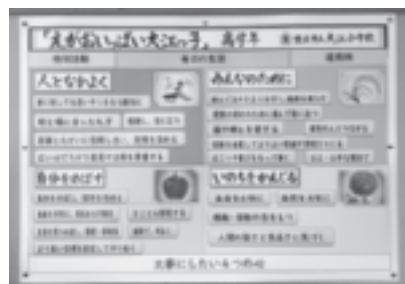
資料7 4つのアイコン

程で、子どもが自分の心や行動を見つめ直すことができるよう、道徳科の内容項目のまとまりを示したA、B、C、Dの四つの視点を基に、上の「りんご」自分伸ばす、「さやえんどう」人となかよく、「いなほ」みんなのために、「おおえのき」命を感じる」の四つの心をアイコン化し、平成二十一年度から掲げている（資料7）。これまでも特別活動や道徳科の授業において、この四つの心が子どもたちの学びを深めるためのツールとして活用されてきている。

各教室の前面には、道徳の内容項目と四つのアイコンをまとめた提示物を掲示し、特別活動や道徳科を中心に活用を行っている（資料8）。

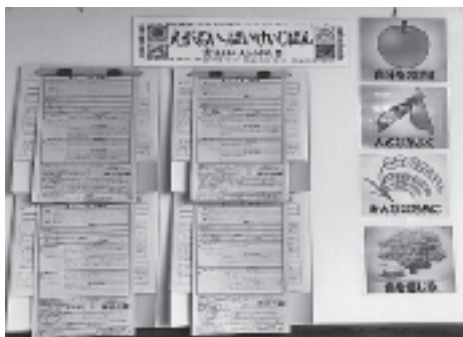
また、本校では、特別活動と道徳科それぞれで学んだことを振り返ることができるよう、学級活動の授業で活用するワークシートや活動の振り返りを水色の紙に、道徳科の授業終

末の振り返りをピンク色の紙に書く取組を行っている。双方の振り返りシートにも、前述の四つの心を基に自分の学びを振り返る欄が設けられている。子どもは四つの心を基に自分の学びを振り返る中で、以前の学びや特別活動なら道徳科、道徳科なら特別活動のことを想起しながら振り返る子どもの姿もある。教師は、子どもたちが考えたことの価値に気付くことができるように子どもたちの記述に対してコメントを付ける。さらに、教師は抽出した数人分のシートを、各教室前廊下の「えがおいっぱいじばん」に掲示する。特別活動と道徳科で色分けしているため、一目で学びをどれぐらい積み重ねてきたのか



資料8

を実感することができる（資料9）。本校が研究の核としている学級活動と道徳科は、到達目標ではなく、個人がそれぞれのように成長したかという視点で評価を行う教育活動である。そのため今年度は、教師は子どもが授業や一連の活動の中での成長を見取り、抽出することを心がけている。さらに、全ての子どもを考えを掲示板で取り上げるように意識して掲示を行っている。そのためか、例年以上にこの掲示板に貼られたワークシートを見ながら、学びを確認する子どもの姿も増えている。



資料9

6 授業の実際

（1）視点I…特別活動における道徳実践の充実を図る工夫

▼六年生「学級の実態をもとに挨拶を活性化させる取組を話し合い、実行する実践」

ア 授業の概要

〈題材名〉 明るく親しみのある挨拶 学級活動(2)

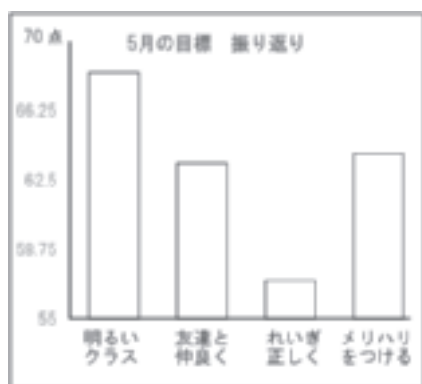
〈題材のねらい〉 学級の課題である「朝教室に入る友達に返す挨拶」について見直し、明るく親しみのある挨拶のめあてを立てたり、活発化させるための取組を考えたりして、実践していくこととする態度を育てる。

イ 授業の実際

a 問題意識を高める出合いの工夫 [かん

視点I(1)(3)] 本学級の学級目標は「明るいクラス 友達と仲良く れいぎ正しく メリハリをつける」である。五月末に子どもたちがそれぞれの項目を100点満点の数値で表す振り返りを行った結果、「礼儀正しく」の数値が五七・一点で最も低かった（資料10）。そうした実態から、「礼儀正しく」のなかでも、特に課題と感じている子が多い「挨拶」に焦点を当てていくことにした。なかでも、「朝教

室に入るとき挨拶」ができておらず、寂しい思いをしている友達がいるという振り返りの結果から、「教室に入ってきた人に挨拶を返すことで、子どもたちが日常的に明るく親しみのある挨拶ができるようになってほしい」と考えての実践である。



資料10 学級目標の振り返り

子どもたちの振り返りを数値化してグラフに表すことで学級の課題が視覚的に明確になり、学級全体の自分たちの挨拶について考えていく必要があると課題意識が高まった。なかでも、「教室に入る際に返ってくる挨拶」が気になるという声が上がったことで、「みんなの意識はどうか」「なぜ、挨拶を返せないのか」等、アンケート調査するなど自主的な動きも見られた。

b 子どもの視野を広げるための情報の提示 [ぱ

視点I(2)(2)]

明るく親しみのある挨拶にするために学級全体でどう取り組むかについて話し合う時間を設けた。その際、「教室に入ってきた人に挨拶を返す」ことについての実態調査の結果を提案グループの子どもたちが紹介した。朝教室に入るときと焦点化したことや学級の課題が明確になったことで、考えたり話し合ったりする内容がはつきりした。自分自身の挨拶を振り返り、様々なアイデアを出し合ったことで、子どもたちが自分事として課題を捉え、解決しようとする必要感をもって意見交換ができた。それが、より自分自身を見つめ直すことにもなり具

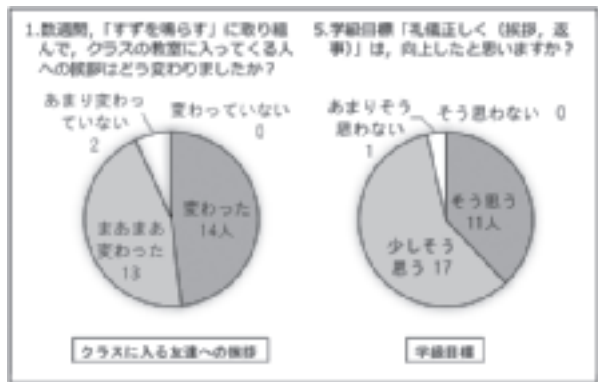
体的なめあて設定へとつながった（資料11）。



資料11

c 意識や行動の変容の見取りや価値付け
「い」視点Ⅰ(3)⑤

授業後に決めたことを実践した後に行ったアンケートでは、九割を超える子どもたちが「クラスの教室に入ってくる人への挨拶」や、学級目標「礼儀正しく」が向上したと感じていた(資料12)。学級の変容や実践の姿勢を価値付けることで子どもたちが成長を自覚し、今後の実践や活動を発展させようとする意欲が高まった。



資料12 実践した後の変容(アンケート結果)

抱いた心	具体的な記述
りんご	・自分から挨拶を返せるようになった。 ・挨拶を通して自分も礼儀正しくなる。 ・もともと挨拶が苦手だったので、取組を通して教室以外でもきちんと挨拶ができるようになったと思った。
さやえんどう	・挨拶を通して人と仲良くなったと思った。 ・挨拶も高まったけど、挨拶のあとの一言が仲を深めていると思った。
いんげん	・挨拶を通してみんなの心が変わった。 ・挨拶を通してみんなと仲良くなれたと思った。 ・《取組を通して挨拶をすることが》みんなのためになったと思った。

資料13 成長の実感

上は、子どもたちが実感した成長をまとめたアンケート結果である(資料13)。

学級での挨拶の高まりで自分たちの成長を実感することができたことで、学級の課題に目を向けて、さらによりよい学級を目指す姿が見える姿が見られるようになった。今後も、子どもたちが課題に気付いて話し合ったり、学級や学校全体に活動や実践を発展させていったりしていこうとする意識をもてるよう、手立てを講じていきたい。

(2) 視点Ⅱ…道徳科における主体的・協働的な学びの工夫

▼四年生「価値理解を基に自分の生活を振り返って議論する実践」

ア 授業の概要

〈主題名〉 相手のことを考えて (B 相互理解、寛容)

〈教材名〉 「ちこく」(出典「小学どうとく生きる力4」日本文芸出版)

〈ねらい〉 かずやの遅刻に対して、一方的に責めていたが、約束を守れなかった理由を知り後悔したこう太が、どうすれば後悔せずに済んだのか考えることを通して、自分の気持ちを上手に伝えながら、相手の考えを最後まで聞いたり、相手の状況を理解したりすることが大切であることに気付き、自分と異なる意見も大切にしようとする態度を育てる。

イ 授業の実際【○成果 ●課題】

a 教材や生活場面から道徳的価値を基に自己を見つめる動機付けを図るための導入の工夫

「かん」視点Ⅱ(1)②

導入で事前に取ったアンケート結果を提示し、意見が合わないときがあるのはどんなときか出し合い、その後に、「友達と意見が合わないときに、どうすればよかったのか」と発問した。その際の子どもたちが悩んでいる



資料14

とで、子ども自身の経験を基にしながら、意見が合わないときの様子について具体的に共有することができた。このことが、学習への意欲の高まりにもつながった。

○ 友達と意見が合わないときにどうすればよかったのかと悩む子どもの言葉を基にめあてを立てたため、子どもが「考えたい」という思いをもって学習に取り組むことができた。

● 一時間の学習を通して、友達とうまくいくための方法について子どもの意識が向かっていったため、展開部分で軌道修正が必要になってしまった。

b 深い思考を促すための教師の関わり

「は」視点Ⅱ(2)①

展開において、相手の気持ちを受け入れるという反応に対して教師が「相手の思いを聞きさえすれば、友達とうまくいくんだね」と

揺さぶることで、自分の思いも大切にすべきであるということに気付くことができるようにした。

○ 教師の揺さぶりで子どもが「相手の思いを聞く以外にうまくいくために大事なことがあるのか」と立ち止まり、めあてについて再考するきっかけとなった。

● 学級の実態として自分が我慢をしても相手に優しくしようとする子どもが多く見られたので、問い返しを行い「自分の思いも伝えたほうがよい」という思考を促したいと考えたが、考えを揺さぶるには至らなかった。

問い返しのほかに、「○○だったらどうする?」といった状況を変えて考えることを促す発問から揺さぶる必要があったと考える。

また、本時のめあてと問い返しの関係についても検討していきたい。

c 道徳的価値の理解を深めるための共有の工夫

「い」視点Ⅱ(3)③

見つめる・生かす活動において、友達と自分のこれまでの経験や授業を通して考えたことを書く活動を設定することで、多面的・多角的に相互理解、寛容について理解を深めるとともに、これからの自分についても深く考えることができるようにした。

○ 見つめる・生かす活動に十分な時間を確保



資料15

保したことで、友達が多様な考えを聞いた上で、自己の生き方についてじっくりと深めた考えを伝える発言が聞かれた(資料15)。また、自分の生活について丁寧に振り返った後に、学級で共有し

たことで、本時の学びをこれまでの自分の生活を基にして考えたり、これからの自分を意識して考えたりしている記述が多く見られた。

○ 本実践では、これまでの実践と異なり、書く活動を授業終末に設定して振り返りに取り組んだ。書くタイミングを変更したこと、子どもたちは、実生活での話し合いで考えたことも踏まえながら道徳的価値について記述をすることができていた。さらに、子どもの考えの変容や学びの深まりなど教師が見取ることができた。

● 話し合いの時間が長く続いてしまったため、メリハリがつけづらい子どもの姿が見られた。メリハリをつけるために学習形態の工夫を考える必要がある。

ウ 授業後の様子

授業後、子ども同士のトラブルが生じた際に、自分の思いだけを押し付けるのではなく、相手の気持ちになって考えたり、立場を考えたりして受け入れることができた子どもがいた。その子どもにも「なぜ受け入れることができたのか」と尋ねると、「道徳で相手に理由があるかもしれないと学習して、冷静になったからそう考えることができたから」という答えが返ってきた。そこで後日、その事例を学級全体で紹介し、一人一人の相互理解、寛容の理解がさらに深まるようにした。今後、子どもたちが道徳科の授業で学ぶことの大切さを感じることができるよう、教師による価値付けを大切にしていきたい。

7 成果と課題

(1) 研究の成果

【学習過程「かんぱい」の授業づくりについて】

視点Ⅰ…特別活動における道徳的実践の充実を図る工夫

○「かん」では、議題設定において学級目標の到達度の数値での振り返りを提

示したことで、子どもたちが学級の課題に目が向けることができた。定期的に学級目標の振り返りを位置付けることで、子どもたちの課題の把握、議題の設定につながりやすくなることが分かった。

○「ぱ」では、事前に司会グループが調査したものを学級会の中で紹介、掲示を行ったことで話し合いが深まっていた。学級会の中で、学級の実態が分かる情報が共有されていると、実態に即した話し合いが展開されやすいたことが分かった。今後話が深まるために、どのような情報共有が必要かを探していきたい。

○「い」では、学級の変容や実践の姿勢を教師が価値付けることで、学級アンケートでも九割を超える子どもたちが学級の高まりを感じることができた。教師による価値付けの在り方や、振り返りの行い方について今後も検討を行っていき

たい。

視点Ⅱ…道徳科における内面的資質を養う工夫

○「かん」では、事前に取ったアンケートを提示し意見が合わないときの状

況を出し合ったことで、自分自身の経験を基にイメージしながら悩む子どもの姿が見られた。自分の様子を全体に向けて語りやすくなる点もよかった。

○「ぱ」では、「相手の思いさえ聞けばうまくいくだね」と教師が要素を整理する投げかけを行ったことで、子どもたちが「ほかにも要素がありそうだ」と立ち止まり、めあてについて再び考えようとすることができた。子どもの発言からどのような要素から考えているのを見取り整理した上で、教師が子どもたちに発問を投げかけることは多面的な学びにつながることも分かった。

○「い」では、友達と自分のこれまでに経験したことや授業を通して考えたことを丁寧に交流することで、振り返りを書く活動の質が高まることが分かった。交流の仕方については今後も研究を重ねていきたい。

(2) 課題

「心豊かに未来を切り拓く大江っ子」の育成に向けて、発達段階や学年間のつながりを意識し、授業や教育活動での手立て等について、引き続き明らかにしていきたい。